

拙著『ナショナリズムとマスメディア—連帯と排除の相克』について

文責 社会学部教授 津田正太郎

拙著『ナショナリズムとマスメディア』（勁草書房、2016年）は、2017年度第6回内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞をいただくことができました。また、この著作の出版にあたっては法政大学より助成を受けており、本学の教員であったからこそ世に送り出すことができました。大変に感謝しております。

私は大学の学部生だった1990年代半ばより、ナショナリズムとマスメディアというテーマに関心を持ち、ずっと研究を続けてきました。マスメディアの発達とナショナリズムの出現や拡大が深い関係にあることは多くの研究によって示されてきました。国家への忠誠を求めるとともに、他国にたいする敵対心を煽るという狭い意味でのナショナリズムのみならず、遠くに暮らしている見たことも話したこともない人びととの間に「同胞意識」が生まれ、国民共同体が形成されていくにあたって、マスメディアは重要な役割を果たしてきたというのです。

本書の前半では、これまでにナショナリズムとマスメディアについてどのような研究が行われてきたのかを整理したうえで、国民共同体の利益の実現を求める「理想的ナショナリズム」と、見ず知らずの同胞にたいする仲間意識という意味での「認知的ナショナリズム」という概念を提起しました。そこから、それぞれの「ナショナリズム」とマスメディアとがどのような関係にあるのかを考察しました。

本書の後半では、近年において盛んに論じられているリベラル・ナショナリズム論を出発点としながら、ナショナリズムは乗り越えられるべきものなのか、より良いナショナリズムを実現するためにマスメディアはいかなる役割を果たしうるのかを検討しました。困窮する同胞への共感を喚起し、その支援にたいする支持を広げる一方で、血筋や国籍で区別するのではなく同じ社会でともに生きる存在として同胞を定義しうるようなナショナリズムのあり方を模索し、そうしたナショナリズムのあり方にマスメディアはいかに寄与しうるのかを論じました。

無論、ナショナリズムが連帯意識のみならず、その裏返しとして強い排他性を伴っていることは多くの論者によって指摘されています。しかも、近年では、同胞にたいする連帯意識よりも不信感を特徴するナショナリズムが観察されるようになってきました。シニズムを特徴するそうしたナショナリズムを本書では「シニック・ナショナリズム（冷笑家ナショナリズム）」と呼び、それが一方においては国民の団結を訴えながらも、他方では国民共同体の内部に憎悪と猜疑心を自家中毒的に広めていく現象について考察しました。

本書での考察はあくまで理論的なものに留まっているため、現在は戦間期から第二次世界大戦期のイギリスにおけるマスメディアの役割について研究を進めているところです。数年後にはまた著作として出版したいと考えております。